

佛印への道

「道と兵隊」續篇(二)

根井友信

武男君

どうも文句が切れ／＼になるが許してくれ。時折寸暇を得て少し宛書き續けるのだから、僕としては止むを得んのだ。

結局、派洞村に於ては約三十軒に亘る區間の戦車壕を二十七ヶ所、鹿砦を六ヶ所、橋梁を十三ヶ所修復した外、側溝・暗渠の構築を遣り遂げるのに僅か十日間であつた。

そして月末の〇〇日、其處を終へた日の内に轉進することになり、夜行軍で此の那夏村へ前進して來た。君の手元の地圖にも載つてゐる筈の寧明と云ふ街から六軒程西へ寄つた所である。此處には佛印からの鐵道が通じてをり、我々は十軒の道路補修と五軒の鐵道復舊とを擔任することになつた。

鐵道は敵が援將ルート強化の爲め近來造り始めたのであるが、漸く軌條を敷設したばかりで皇軍の進撃に遇ひ、今度は反對に自

分の手で破壊しなければならんことになつたのだ。實に悪い鐵道で作業量が大きい。

それに今月に入つてからは毎日のやうに雨である。此の邊の雨季でもあるのか。終日しと／＼と降り續く。暑さが厳しいのに濕氣が多く、じめ／＼と蒸し返へされて堪まつたものでない。使ひ舊した天幕は雨漏りがして身の置き所もない。寝具もずぶ濡れである。それより一番閉口するのは擔任道路の悪いことだ。寧明以西は狭い舊式な道で碎石も殆んど入つてゐないから、敵が破壊した跡ばかりでなく、何處も此處も、雨の爲めに田圃みたいな泥濘となり、いくら修理しても、自動貨車の群列が一回通ると忽ち滅茶々になつてしまふ。美くしい岩山は好適な碎石採取場であり、民工を入れて割らしてをるが、それ位のことでは到底間に合はない。

自動貨車が日に幾回となく穴に抜つたり谷へ落つこちたりするるので、其の都度押し上げや牽き上げをせねばならぬ。兵隊は皆頭の上から泥まみれである。それに急造橋は浮き上つたり、暗渠側溝が溢れたりして、道路は一向に良くならず、作業量は少しも減らない。此の限らない作業との根氣比べで、身體も精神もすつかり消耗するかと思はれた。

ところへ昨日の晝過ぎ、本部の傳令が飛んで来て、

「那堅州村で橋梁二ヶ所破損したから、直ちに行つて修復しろ」との部隊命令を傳へた。

敵の破壊か水害か、直ぐ本部へ連絡して情況を訊いたが詳細不明とのこと。調書を出して見たら、十餘米の二連橋と三米程の橋で、二橋の間が一軒半程隔つてゐる。二箇隊を連れて行く積りで自動貨車の手配をしたが都合つかず、止むなく我隊配屬の自動貨車〇臺で、安藤隊だけ連れて行くことにする。

取り敢へず糧秣、彈藥、器材など應急準備を整へ、後を齋藤少尉に頼んで、十五時頃出發、東進する。道路は交通杜絶で他の自動車は一臺も通らない。此れでは作戰計畫にどんなにか支障あることだらう、と想はれて氣が案ずる。曾て我隊で補修した所もかなり傷んでをり、自動貨車がスリツプして危険である。運轉手が「昨夜は北江迄糧秣受領に行き、戻つてから故障箇所を夜通して修繕し、僅か二時間より眠れなかつた」と言ふ。血走つた眼を腫

はつて懸命にハンドルを操作してゐるのが氣の毒になる。

途中で本部の黒田中尉に出會つた。那堅州村の被害箇所を偵察して來たとの事で情況を訊く。大きい方の橋は橋脚が流失し、破損程度甚だしいが、もう一橋の方は橋礎が崩れ橋體が傾いてゐるだけだとの事。心配した程のこともなささうだ。

十八時過ぎ、勇躍現地に到着。直ちに復舊計畫を樹て、兩橋を同時に始める。一通り段取りを終へてから、橋側に腰下ろしてほつとする。四圍は芝一面のなだらかな丘陵地、南方に川幅の廣い明江が斜陽を受けて白く輝いてゐる。増水満々と岸に迫つてゐるが沼の如くに靜かである。對岸の森は黒々と眠つてゐる。風もない。

當番兵が何處からか龍眼の實を探がして來た。それをしゃぶりながら、欽寧公路時代に魅惑された荔枝の味を懐しむ。

次第に夕暮籠めて、遠くの方から霞んで來る。照助の設備をすする。蚊が唸り出す。ぎつとしてゐられず、兩橋を見廻る。

二十一時頃になつて、急造炊爨の簡單な夕食を喰べる。其處へ十數臺の自動車隊が西進して來た。赤い三角旗を附けた乗用車もあつた。

「通れないことを知つて來たが、急ぐから成るべく早く通してほしい」

と言はれ、飯もそこ／＼にして又始める。

小橋の方は二十三時頃終つたが、流失橋の方はさう簡單には出
来ない。兵隊は懸命に暗い中で働いてゐる。手元もはつきり分ら
ず危険である。下士官の聲だけが強く響く。螢がすい／＼飛んで
ゐる。

無休息の奮闘は遂に夜中の二時頃、取り敢へず自動車の通れる
だけの施設を成し遂げた。

待つてゐた自動車隊を通過させてから、一先づ休むことにして
皆を假眠させる。僕は二料程離れた部落にゐる警備隊へ行き電話
を借りて部隊本部へ報告し、戻つて兵隊達と一緒に叢の中で眠む
る。マラリヤ蚊も氣にせず寝込んだが、とろ／＼としたばかりで
物音に目覺める。兵隊はもう仕事にかゝる所だ。かなりしてから
東が白む。又も霖雨が降つて、相變らず蒸し暑い。

完備作業を急ぐ。○砲兵隊が來たので通してやつたら、緊定し
てない轉木が幾本か折れてしまつた。橋脚の緊材取付、ポールの
の緊定、橋床の遣り替へ、上置土、取合道の石積等々作業は着々
進む。最後に谷底から少しの砂利を拾ひ集めて敷き並べる。

斯くて十六時、全作業を完了した。折よく自動車群列がやつて
來て、どん／＼疾走する。實に嬉しい。跡片附をして引き上げた。
明るい内に那夏村へ戻り、一切を部隊長へ報告した。自分の暮舎
に入つたら、加給品の煙草一個とサイダー一本とが配られてあつ
た。

眼を睜つて驚喜する。此の方面へ入つてから始めてゐる。早
速煙草に火をつけ、サイダーを抜く。その一服その一口に涙が濡
れた。後方幾百料の困難なる輸送路を考へると、糧秣、彈藥の補
給さへ容易でない現狀である。此の煙草此のサイダーが我々に與
へられる爲めには如何に多くの汗と膏と血とが支拂はれたこと
か。洵に有り難いことである。此の嬉しさ、此の美味しさ。唯感
謝あるのみ。

感涙に浸つてゐた所へ部隊長から電話が掛る。

「來る○日迄に憑許へ集結することになつたから、早急に作業を
完成して貰ひたい。そして明日少なくとも半數の人員を夏石——曼
葩村間へ入れるやうに」

と。又前進であり、作業増加である。早速夫々の手配を構する。

何時か雨が上つたらしく、しーんと静まり切つてゐる。遠くか
ら唄聲が流れて來る。

「昨日もぬかるみ、今日も亦。

ぬかるみ膝つく、戦線よ。

……………

岩瀬上等兵の聲らしい。彼は温順なしくて口數の少ない兵隊で
あるが、唄は本當に上手だ。彼の家庭など思ひ合はされ、
哀調ひとしほ胸に沁んで、ほろりとさせられる。

一先づ此の便りを結ぶことにする。

八月〇日

武男君

前便の續きを書かう。

作戦開始の日が段々迫り、作業を早く終へねばならぬのに、連日の雨に祟られて思はしい成果を示さず、氣ばかりあせつてゐる内に、數日が過ぎてしまつた。そして憑詳集結も近い或る日のこと、國境方面へ行つてゐた筈の青村部隊長がひよつこり僕の幕舎へ入つて來られ、

「寧明橋が流失し、其の復舊を命ぜられたから、一緒に來てくれ。」

と。餘り咄嗟のことに間誤附く。呆れながらも大急ぎで身仕度してお伴する。青村部隊長の乗用車で纏て明江河畔に着く。

滔々と流れる濁水は川幅約三百米の河川斷面一杯に盛り上つてゐる。もう少し増したら溢れて、周圍一帯に氾濫さうだ。流速は二米弱かと思はれるが、水深はどうしても十七八米あるだらう。大きく波打つて物凄いはかりである。身體が吸ひ込まれさうだ。假橋など勿論影もない。

「架橋方法 如何？」

部隊長から訊かれた。

「目下處置なし、減水を待ちます」

と答へたものゝ「馬鹿!!」と例の鋭い怒號を覺悟して頭を下げた。

「よろしい! 贊成!!」

意外。珍らしく御意に適つた。尙同行するやうに言はれて、部隊本部へお伴する。

部隊長が〇〇司令部へ行つて來られてから、各〇隊長や部隊附將校が集まつて合同研究が始まつた。そして計畫の大綱が決まり「貴隊が主になつて作業をやるやうに——」

と命令を受けた。

黄昏れて一人とぼ／＼と歸途につく、頭は架橋のことで一杯だ。延長二百數十米、幅員三米八の橋梁を七日間で完成する。材料蒐集だけは他隊でやつてくれることになつたが、兎に角大任である。如何なる部署で、段取りはどうするか。實にむづかしい、すつかり上氣してしまふ。幕舎へ歸つて夕食を目の前に突き附けられても夢中であつた。其處へ追ひ駆けるやうにして、水野部隊長からの電話である。

「唯今の命令で、貴官は部隊本部附兼務となつた。明日から本部へ出てくれ。」

と、何たることぞ。唯呆然とする。

「本當ですか。そして自隊の方はどうなるんです？」

と漸く聞き返へせば、

「勿論、隊長はその儘だ。

と突き離なされる。言ふ所を知らない。多分合同研究の時、僕の意見が採用された爲めであらう。結局本部附で計畫を樹て、隊長として作業をする。作戦と戦闘との二役擔任になつたのだ。

いや、その日からの忙がしさと云つたら、到底説明の方法もない。此んな紙片を幾枚使つても、どれだけ僕の知つてる文字を並べ立てても、君にはその片鱗も理解して貰へんだらう。先づ本部附としては、八方資料を蒐めて計畫設計を樹て、木材蒐集隊へ通報するやら、運搬方法を講ずるやらで電話に掛り切りであり、自隊に對しては、夫々部署を決め指示を與へ、測量から器具、資材の準備、民工の募集に至る迄奔走する。何時かも知らせたまうに我隊は架橋隊の尊稱を貰つてをり、それ程多くの橋梁を手に掛けてゐる。従つて一兵に至る迄架橋作業を會得し、自信満々であり、然も僕の自慢の優秀兵ばかりである。方針さへ決めてやれば後はどしどし遂行してくれるけれど、一面架橋隊の尊稱に背かないだけの成果を擧げねばならん責任も感ずる。まして今回の如き我部隊だけでなく、〇〇長閣下を始め他部隊環視の中である。慎重に慎重を重ね、氣骨の折れること一方でない。

幸に雨季も過ぎたのか、作業に着手したら天候が次第に好くなつたので、まだ水も引かない内から將兵は濁流に棹さして、架橋を始めた。晝夜兼行、不眠不休、僕も無我夢中であつたが、兵隊

こそ實によく働いた。兵隊は何時でも申分なく奮闘してくれるけれど、今度こそ曾てない程に献身的な努力、粉骨碎身、文字通り精魂を傾注した。滅私盡忠、そのものであつた。

門橋樑が倒れさうになつたこともある。幾人かの兵隊は濁流に溺れかゝつた。使ひ舊した打朽綱は幾回も切れた。材料船が轉覆したこともある。燕尾鎧を拾ふ爲めに決死的に河底まで潜つたこともある。危険な離れ業が幾度となく起つた。特に此の橋で苦心したのは軌條の使用である。出水に浮かされない爲めに、二十四本並びの軌條桁を使用したり、橋脚毎に上下流から振止めを施したり、水殺ぎを造つたり、軌條だけでも數百本を扱つた。その爲めに負傷した兵隊もある。それでも作業は豫期通りぐんぐん進捗した。兵隊の意氣に即應して逐次出來上つて行く。素晴らしい能率である。神技に等しい。若し内地で此んな仕事が出来るなら、一ヶ年分の工事を數ヶ月で終へるだらう。

假りに一ヶ年かゝるとしても人員を減少することが出來、相當多數の技術者を大陸へ送り出せることになる。萬が一にも生還出來たら、大いに主張しやうか知ら。などと生還を夢見ると鼓動が無暗に高鳴る。

橋脚の上に突立つて、徹夜作業を眺めながら胸躍らしてゐる僕を想像してくれ。やがて僕の夢を諭すやうに、東の空が次第に白んで來る。

小さい星が名残りの瞬きをする。川霧が乳藍色に茫乎と漂ぶてゐる。それも段々、薄らいで、陽光が燦々と輝き始める。

黙々として疲勞も知らず働き續ける兵隊が浮き出して来る。任務遂行の一念に凝つて私心なき其の聖なる姿、手を合はせたい位だ。

此れでは如何なる作業でも不成功である筈がない。果して我等の大橋梁は完全に出来上つた。魂の結晶は遂に成功したのだ。大きな感動がぐつとこみあげる。

昨〇〇日盛大な竣功式が擧げられた。第一線橋の橋に竣功式など可笑しく思ふかも知れないが、〇〇〇〇長閣下が非常にお喜びになつて、特に作業員を犒らう爲めに發意されたのである。それで昨日は閣下自ら幕僚を従へられて、乗馬で渡り初めの行事をして下さつた。閣下の揮毫になる「靈明橋」の橋名柱はひとときは輝いた。祝辭があり、天皇陛下の萬歲三唱、乾杯が行はれる。感激と歡喜が湧き返へる。滅多に笑つたことのない青村部隊長も傍に來られて、

「君、橋は技術的良心に恥ぢない威容を備へてゐるね。」

と非常に御機嫌が良い。僕の心は變に浮々として、閣下の泥鰌聲や、部隊長の伸び過ぎたカイゼル髭が可笑しくなつたりする。氣付けば僕こそ見苦しい顔面で、長い間剃らなかつたから、手の指にざらざらと絡らむ。

幸に午後から戦力培養の休暇が與へられたので、何よりも先づぐつすり一眠りし、夕刻霧を刺り風呂へ入つて人心地つく。

夕食には〇〇長から頂戴した酒で陶然となる。長らく停滞した内務のことで曹長や准尉が何か言つて來たが夢心地、又も死んだやうに眠る。明けて今日、心緩んだかすつかり寢坊する。作業員は架橋作業の殘務整理で出て行つてしまふ。僕は事務書類を檢閲したり命令報告などに眼を通したりしてから、此の便りを書き出した。そして漸く此處迄書いて時計を見たら、既に正午を過ぎてゐる。

先程作業場から迎へが來た。これから急いで中食し、出かけることにする。

武男君。

以上を書いてから一週間が過ぎた。今は佛印國境に居る。悉々作戦命令を受け、近く出發だ。今日書いてしまはねば果して何時書けるかわからない。急いで此の七日間のことを書いてしまはふ。

あの日作業場で部隊長に會つて、前進命令を受けた。然し靈明橋が完成したのと、作戦が迫つたのとで、軍の輸送が激増し、今度の前進には自動貨車に乗せて貰へなかつた。

個人の持ち物は勿論、器材の一部まで携行して炎熱の下、強行軍をやるの外なかつた。僕も兵隊と勞苦を共にする積りで、愛馬を内藤軍醫に貸して歩いた。

「今日の任務は行軍である。任務の達成に勵進せよ」

と其の朝激勵を興へて出發したが、一天雲なき快晴、灼きつける太陽はざり／＼と五體を責め立て、架橋作業にはあれ程素晴らしい成果を擧げた兵隊も、不得手な行軍では僅か十餘軒で早くも落伍者が出る有様、十三時半、曼葩村でもう動けなくなつてしまつた。

止むなく夕刻迄休むことにして、皆を樹蔭で寝させる。暫らくして見廻つたら、ごう／＼高野で生體もない。僕もザボンの樹蔭へ入つてまどろんだ。

十八時、夫々飯盒炊爨で夕食、腹拵へしてから集合 水野部隊長から嚴しい訓示がある。

「皆も知つてゐる如く、戦車隊も砲兵隊も既に前進した。各警備隊も昨日國境へ集結した。従つて途中には警備がない。情報に因ると敗殘兵の出沒が激しいさうだ。行軍中絶対に隊形を亂してはならん。落伍すれば危険である。此れ位の行軍で參るやうでは戦争に勝てない。死ぬまで頑張れ！」

「警戒を嚴に、一段と緊張して歩き出す。夕陽はかなり西へ傾いたが、今度は眞面に照り付けて一層鋭い。やがて又倒れる者があつた。一人、二人、三人……それを叱りどばし、水を吹き掛け、或は戦友が抱いたりして、無理矢理に全員を引きずつて進む。

段々暗くなつて足元が分らなくなり、遂に夏石附近で眞暗にな

る。皆黙つてゐる。喋べる元氣もない。靴音だけが響く。熱氣が籠つてゐて、晝間と同じに蒸し暑い。そよ風も吹かぬ。呆れる程無限に汗が滴り落ちる。身體が次第に細るかと思はれる。どうしたのか此の日に限つてメーコールもなく、乾いた砂塵が立ち舞ふ。目に見えないが、鼻や口から遠慮なく侵入して咽喉がかす／＼する。

小さな石ころや僅かな凹みに足を捕られて、どたり／＼と倒れる兵隊がある。後ろの兵隊がそれに踰めいて又重なる。然し痛いとも言はずに起き上つて、矢張り黙々と歩き續ける。誰の胸にも「佛印へ、佛印へ」の叫びがある。

漸く月が出たけれど、足先は定かでない。道は遠く、装具は重い。腹立たしくなる。「小休止」の號令をかけると、其の儘倒れるやうにべた／＼と路上に崩れて動かない。装具を解かうともしない。豫定の休止時間が経つても可哀さうで「前へ」の號令が躊躇される。

然し一旦號令をかけると、兵隊は少しの逡巡もなく一齊に立ち上つて、同じやうに流れて行く。誰も自分の力で歩いてゐるとは思はない。何か別な力に巻き込まれ、押し出されてゐる感じだ。よく見れば隊形は整然としてゐる。ぎつ／＼／＼軍靴が持つ巨巖に笈する。何と雄々しい進軍だらう。僕は此處にも亦偉大な力恐ろしい力を發見した。

人間個人の力ではない。何處に潜み、何處から湧くか分らない力、作業の時に感じたあの尊い、あの神々しいものと同じである。

二十四時、界龍村附近と覺しき所に到着、朝からまだ三十餘斤しか歩いてゐないが、大休止と決めて、兵隊を寢かせる。深い月の光が眠る兵隊を包む。僕も防蚊面や防蚊手套を欲めて、路傍にころり横たはる。ところが變に眠れない。足がぼつ／＼と熱を持つて疼く、身體の節々が何とも云へず怠る。

滿天の星が何かを私語くやうに隣ぎ、變に郷愁が湧く。故國を去ること幾千軒、よくも來たものかな。もう佛印國境も間近かである。

うと／＼と僅かにまどろんだら、早や六時、出發である。まだ暗い。暑くなる前に能率を上げやうと急ぐ。前日からの肉刺が針で刺すやうに痛む。

龍州への別れ道近くで明るくなる。此處からは諒龍公路であつて、魯龍公路遮断後も敵は此れを僅かの援將ルート、新國防線として最近まで使用してゐたものである。それが過般の國境作戦で皇軍の奇襲に遇ひ、破壊の暇もなく遁げ去つたので、完全に残つてゐる。吳村墟附近の改良路線と違つて舊い道であるから、餘り立派ではないが、砂利も多少入つて居り、道幅も四米以上あつて支那としては上等の方である。小さな川に架つてゐる幾つかの橋は目地を用ひないメーソンリーアーチで、洪水の被害を避けんと

したものか、橋長も高さも大きく採つてある。従つて取合せがかなり急勾配になつてをり、疲れた足では橋を越えるのに骨が折れる。

此の日も亦暗れ切つた灼熱の地獄であつたけれど行程僅かに十餘斤で、途中馮詳で部隊長の訓示を受けて手間取りながらも、正午前に此處均化村と云ふ我等の目的地へ到着した。此處は僅か數軒の汚ない部落だが、樹立ちに包まれた、感じの良い所である。水も綺麗である。嬉しいことには隊が多いので、毎日隊ばかり喰べてゐる。野菜は何處でも少なく調辨出来ない。米はどうして入つて來るのか安南米ださうな。廣東米と同じである。内地でも此頃は外米だと云ふことだが、僕等は此れで幾ヶ月外米（僕等は現地米と言ふ）ばかりで生きて來たことか。

此處へ來てからの數日は佛印作戦の準備で忙殺された。鐵道作業は早くから坂元部隊によつて實施されてゐたが、我々も相當仕事をした。そして愈々待ちに待つた〇〇の日も決定した。我々の任務も與へられた。

各部隊はぞく／＼前進する。友軍飛行機は幾臺も國境の空で盛んに翔ぶ。僕も今日、鎮南關へ國境偵察に行つて來た。頑強な拱極門と云ふのに「南疆重鎮」と刻んだ石額が嵌つてゐた。砲臺山に昇つて目の下に眺めた佛印は確かに誘惑であつた。大きな洋館建築があり、フランス人の邸宅らしい綺麗な家も幾軒かあつた。

赤青黄、色とりどりの屋根が、殺風景な支那家屋ばかり見て来た眼に強く映じた。

双眼鏡では遠く諒山や那峯の邊りまで見渡せ、同登の驛など手に取るやうによく分つた。憧憬れの佛印であり、安南である。

安南と云つただけでも理由なく親しめて懐しい。三色旗繖る國境警備の監視所には、安南兵らしい三四人の影が動いてをり、遊びに行つてやりたい氣持ちを起こさせた。

然し考へて見れば、鐵道は佛印内で數箇所破壊されてをり、同登の手前の丘には陣地が構築してあつたから、ある程度の覺悟は決めねばならない。

唯残念なことには此の大切な時になつて、僕も遂にマラリヤに罹つた。此んなことを知らせると君達はどんなにか心配してくれることだらうが、マラリヤは決して恐ろしい病氣ではない。殆んどの兵が罹つてゐるので良く様子は知つてゐるし、僕のはマラリヤの中でも一番始末のよい三日熱ださうだから、全然恐れはせん。唯發熱の時だけは何と云つても堪まらぬ。熱が高く寒氣がするし頭は痛み、身體の生氣が抜けてしまふ。若し作戦に當つて此んなことの爲め、充分に働けなかつたとしたら、何とも申譯ない次第だ。

先程兵隊が沸かしてくれた、麴の風呂ですつかり身體を洗つて来た。下帯も新しいのと取り替へた。既に一切の準備を終へた。

命令を待つばかり、今更ら覺悟でもない。

風呂から上つた儘の眞裸で、最後になるかも知れん此の便りを書いてゐる。此の室の開け放しの出入口からは、眞正面に國境の山脈が眺められる。スエールの霽れた後の山は美しくしい。自動車隊が地響きを立て、後から／＼と國境へ向つて轟進する。今日は埃も立たぬ。隣の事務室では、

「佛印へ行つたら虎狩りをやらう。」

と話が沸いてゐる。

此れで書き終へたが、軍事郵便は二三日前から打ち切りになつてゐるし、此の内容では作戦終る迄出さない方がよからうと思はれるので、此れを圖嚢に入れて出發する。幸に生き存らへてゐたとしても、何時何處で出せるか分らない。今度の作戦は今迄とは勝手が異つて一寸見當も附かん。

知る限り、會ふ限りの方々に、特に宜しく傳へてくれ。

八月〇〇日

(終)

